

各地で話題の病虫害

ウスコカクモンハマキ

学名: *Adoxophyes dubia* Yasuda

2005年4月、鹿児島県内の施設栽培カンキツにおいて、硬化前の新葉にチョウ目幼虫による加害が確認された。羽化した成虫を同定した結果、本種であることが判明した。

本種は静岡県から沖縄県にかけて広く分布し、チャをはじめヤマモモ、ネジキ、ヤブサンザシ、アオキを寄主とすることが知られているが、カンキツへの加害は国内において今回初めて確認された。本種の外観はチャノコカクモン



ハマキに酷似しており、過去には混同されていたが1998年に分類が見直され、新種とされた。

本種雄成虫の前翅前縁褶の裏

にはピロード状の鱗片群があるのに対し、チャノコカクモンハマキではこれを欠く。卵は楕円形で黄色く、うろこ状に重なり合った塊をなす。終齢幼虫の体長は約10mmで、黄緑色、蛹は体長約7mmで褐色である。

発生は年4～5回であるが、全てのステージを通してチャノコカクモンハマキよりも有効積算温度が高く、発生が遅れる傾向にある。

一方、27℃以上において発育遅延を起こすため、夏場の発生は少ない。

カンキツでの被害は幼虫が隣接した新葉を2～3枚つづり合わせて、表皮を残して葉肉を食害し、葉が果実に接する場合は果実にも食入する。

防除対策としてはハマキムシ類に登録のある薬剤の新梢伸長期の散布などが有効である。葉が混み合ったり、果実と葉が接触しているところは特に入念に防除する。

写真提供: 鹿児島県病虫害防除所

キュウリホモプシス根腐病

病原菌: *Phomopsis sclerotoides* Kesteren

英名: Black root rot

キュウリホモプシス根腐病は、難防除の土壌伝染性病害であり、埼玉県、神奈川県、福島県、岩手県、宮城県で発生が確認されている。病原菌は、不完全菌類に属する糸状菌であり、キュウリをはじめウリ科作物全般を特異的に侵す。

病徴は、摘心時期や収穫時期に発現することが多い。初期病徴は、晴天の日中に萎凋し、朝夕や曇雨天時に回復する。これを繰り返して下葉から徐々に枯れ上がり、草勢が衰えて、着果や果実の肥大が不良になる。果実に病徴は見られない。地温が低く乾燥している環境が好適であり、多発すると収穫不能になることもある。

被害は、露地栽培キュウリで大きい。被害株



は地際部があめ色水浸状あるいは白色に腐敗する。根は、初め細根が腐敗脱落し、中太根が淡褐色ないし褐色



色になって腐敗する。病徴が進むと細い根の表皮細胞に擬似微小菌核が形成される。太い根には黒い菌糸のかたまりの擬似子座が形成される。この症状の有無が本病を診断する上で重要なポイントとなり、検鏡すること

により他の病害や生理的な萎凋症状と区別することができる。

発生が確認された場合は、被害植物の根部残さが伝染源となるため、早期に抜き取り、焼却処分する。また、人為的な汚染拡大を防ぐため、発生ほ場で使用した農機具、履物等をよく洗い、土壌を移動させないことが重要である。

本菌は比較的熱に弱い(38～40℃ 24時間、46℃ 1時間等で死滅)ため、太陽熱消毒や蒸気消毒等の熱消毒が有効である。

写真提供: 岩手県農業研究センター